
僕らの非日常

T O M I

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

僕らの非日常

【Nコード】

N1846E

【作者名】

TOMI

【あらすじ】

転校生、たいとうぜんか泰東善果が来たその日に運命の歯車が動きだす。彼らはちよつと不幸な生活をしてちよつと不幸に生きていた……。ある日、異世界から金色の瞳を捜しに来た魔族に出会い、善果たちの日常は非日常へと変化した！

1章 プロローグ

遙か昔 言い伝えがあった

“人間が持つ金色の瞳を食らえば不死になる”

それを信じ 魔王と魔族は人間を襲い始めた

町は焼け 森は燃え尽き 川は枯れ果てた

金色の瞳を持つ者は 軍の者に連れられ異世界に転移した

そのことに激怒した魔王は 人間を容赦なく滅ぼしていった

そして なお争いは続いていた

異世界に転移した金色の瞳を持つ者を探し出すまで……

第1話「始まり」

この世の人生はゲームだ。
死んだら負け、生きているならゲーム中。
けど、ゲームの様にリセットは出来ない…

「初めまして。大地中学校から転校してきた泰東善果です。えっと…よろしくお願いします」

真新しい学ランを着て、黒髪の少年、善果は自己紹介と共にペコリと礼をした。黒板には白いチョークで泰東善果と書かれている。ザワザワと教室の中で飛び交う話しの内容は、ほとんどが転校生善果のこと。

「皆、なかよくしてね。…じゃあ、泰東君の席は一番後ろの空いてる席ね」

担任の先生に言われ、その席へ行く。席に着く途中、誰にも声をかけられることは無かったが、すれ違う度に自分が話題になっていることは分かった。

席は一番後ろのベランダ側。窓は全て閉め切っている。冬なので当たり前とも言えるが、皆とは違う大地中学校の鞆を机の脇のフックにかけ、窓から外を覗いた。蕾も葉も何も無い寂しく見える桜の木が、運動場を囲むように立っている。後四ヶ月位したら綺麗な花を咲かせるだろう。

ふと気が付くと、先生が出席を取っており、名前を呼ばれることにやる気の無い生返事が聞こえた。そして、チラチラと善果を振り

返り、見ては話し出すクラスの皆。別にこんな風に見られるのは慣れてるから気にしてはいない。それに、気にしたところでどうこうなるわけでもない。

善果は軽く息を吐き、机の脇にかけた鞆から筆箱と一時間目の教材を取り出した。ノートは新しいが、教科書は大地中学校で使っていたものだ。学校が違ってても、使っている教科書は一緒のようで、買う手間が省けた。どうやら一時間目の授業は担任の先生らしく、出席を取り終わった後すぐに黒板に何かを書き始めた。

クラスの皆も授業が始まったため、振り返りこちらを見てくる奴はいない。これで少しは授業に集中できる、とノートを開く。真っ白いノートに、シャープペンの芯をつけ、黒板を見る。さあ、新しい生活のスタートだ。

僕は人生をゲームの様に楽しむ

たとえ仲間が倒れても

たとえ誰かが襲ってきても

僕はゲームだと自分に言い聞かせる

自分の罪から目を逸らす様に……

第2話「他人以上、友達未満。」

「よお！お前が転校生の善果か？」

転校初日の三時間目が終わった後の十分休み、少し馴染んだクラスメートと話していた善果の元に一人の青年が現れた。ホツクとボタンをいくつか外した茶髪の青年は、他クラスだというのにズカズカと善果のクラスに入ってくる。善果の目の前に来て、青年は握り拳を突きつけてきた。

「…君、誰？」

いきなり目の前に、しかも拳を突き出してきた青年に、善果は少し戸惑った。

「ああ、俺？俺は鈴木静八ってんだ。よろしくな、善果！」

そうやって青年、静八は突き出していた拳をパツと開いた。重力に従って、拳から出てきたものが善果の机の上へ落ちた。薄いピンク色の袋で包まれた丸いそれを拾って、善果は眉をひそめた。

「え〜っと、鈴木君、何コレ？」

「友達へのプレゼントだ」

そういうことを聞いたんじゃないよ、と善果と話していたクラスメートは同じことを思った。

だが、善果はそんなことを気にしていなかった。静八がポロリと言った、善果の嫌いな言葉…

「…友達？」

小さな声で呟くと、そうそう！と静八が嬉しそうに頷く。

「友達、マイフレンド、仲間！出会った瞬間、いや、出会わなくても俺らは友達だ！」

「…」

くだらないと俯く。友達なんてもういらないのだ。だからこうしてこの学校に転校してきたのに…

「ん？どうした善果？」

突然俯いてしまった善果を心配したのか、静八は善果の肩をつかんで揺らした。一緒にいたクラスメートも心配そうに見ている。けれど、その心配はいらなかった。

「…離せよ…」

「へ？」

ポツリと善果が呟くが、静八は聞き取れなかったらしく首をかしげる。

「離せって言ったんだ！」

肩を掴んでいた手をバシツと勢いよく叩き落としたかと思うと、善果は立ち上がり、静八の背後に回ると背中を押した。そのまま教室の外の廊下まで押し出す。クラスメートは着いてこなかったため、善果と静八の近くには誰もいなかった。

「ど、どうした善果？あ、もしかして肩掴んだの痛かったか！？俺、あんま力加減とかしきんなくて…」

廊下に押し出された静八は、何がなんだか分からなくて、とりあえず善果が怒っていることだけは分かった。なので、自分に思い当たることを言ってみたのだが…

「違うよ。別に痛くなかったよ」

「じゃあ、何怒ってんだよ？」

「…君、馴れ馴れしいんだよね。初めて会ったにも構わず、どこで知ったか知らないけど呼び捨てに名前呼んでさあ。それに、いきなり友達へのプレゼントだなんて言うてくるし…」

「あー、それは悪かった！けど、友達へのプレゼントもいけないのか？飴なんだけど…」

「あたりまえじゃん。だって君と僕、友達じゃないもん」

はい、コレ返す、と善果は先程貰った飴を静八の手に無理矢理渡すと、さっさと教室に入ろうとした。

が、教室に入ることはなかった。前に進もうとした体を、いきな

り学ランの首の後ろを掴まれ、止められたのだ。思わず後ろに倒れそうになった体を支えて、善果は後ろを振り返った。それと同時に学ランも離された。

「なんだよ、まだ何かあるわけ？」

少しイライラしたような声で善果が問うと、静八は二カツと笑い、善果が返した飴を差し出してきた。

「なら、今から友達になろうぜ！」

まだ懲りていないのか。と善果はため息をついた。もうすぐ次の授業の始まりのチャイムが鳴る。それまでには席に着きたい。

「だから、嫌だつて」

「なんでだよ。別にいいじゃねーか。あいつらも友達なんだろう？」

あいつら、と指差したのは一緒にいたクラスメート達。善果はそのクラスメートを見、ハツと笑って見せた。

「友達なんかじゃないよ。彼らは僕のことそう思ってるかもしれないけど、僕は他人だと思ってるから」

静八は一瞬驚いたように目を丸めた。だがそれは一瞬で、すぐに二カツと笑うと善果の手をとり、握ってきた。

「なっ…なに？」

手を振り払おうとするが、意外と強い力で握られており、それは出来なかった。男の手を握って、いったいコイツは何なんだ!？と静八の顔を見ようと見上げる。バチリと静八の視線と丁度合い、睨みつけるように彼を見つめた。静八はまったく睨まれたという自覚がないのか、笑顔を崩さないまま、手も離さないまま言った。

「他人以上、友達未満」

ハ?と思うず間の抜けた顔をしてしまった。

何がなんだか分からないままの善果に、もう一度「他人以上、友達未満」と言つて、振り払うことをすっかり忘れた善果の手の中に飴を押し込んだ。

そして、その手を離すと三回目になる言葉と言った。

「他人以上、友達未満。そんでさ、これからめっちゃ仲良くなつて、

親友になろうな！オマエ、昔なんかあったっばい顔してっからさ。俺が助けてやるよ！」

そう言うなり、静八はじゃ！と手を挙げ、廊下を走っていった。二つ隣のクラス、二二に静八が入っていくのを善果はポカンと見ていた。静八の言ったことを頭の中で何回か考え、そしてその言葉の意味が分かった。耳の奥でチャイムの音が聞こえる。だが、善果はしばらく動けなかった。静八の自由すぎる行動と性格。それに苛立っているわけではない。

他人以上、友達未満。

それは、他人と偽り、友達を作るのを避けてきた善果には複雑なけれど嬉しい気持ちにさせた。

善果は二度渡されたことになった飴を、今度はしっかりと握り締めた。

第3話「屋上へ」

彼は嵐のようにやってくる。その度にイライラしている気がして
いるのは気のせいだろうか？

気のせいではない。

授業が終わり、その後の十分休みのたびに彼は来るのだ。そして
話したいことだけを話して、さっさと自分のクラスに帰っていく。
四時間が終わり、昼休みになった今も、嵐はやってきた。

「善果〜！一緒に昼飯食おうぜ！」

知り合ってまだ五時間もたっていないのに：

ズバズカと善果のクラスに入ってくるなり、大声で善果を呼ぶ嵐こ
と静八にため息をつく。その光景を見たクラスの皆は、くすくす笑
ったり静八が現れたことに驚いたりしている。善果はそれをみな無
視し、鞆から今朝コンビニで買ってきたパンを袋に入れたまま出し
た。パンと一緒に買ったコカ・コーラも取り出し、袋に強引に詰め
込んで鞆を閉めた。

「君さ、なんで毎回毎回来るの？僕が転校生だから気になるのは分
かるけど、ちょっとおかしいよ？」

善果の机に来た静八にそう言うが、静八は何が？と首を傾げた。
弁当の匂いや、教室のザワツキが大きくなる。

「おかしくないだろ。俺は、なんかオマエが気になってるから来て
んだ」

さらりと静八が言った言葉に、善果は一步引いた。こいつ、何を
言ってるんだ！

「僕はそっこの趣味はないからね！！」

ぶんぶんと顔の前で手を振り、静八に言い聞かせる。静八の言葉
を聞いたクラスの数名が、静かになったのが分かった。静八も、善
果と数名の反応を見て気づいたようだ。

「だあ！ち、違つぞ、俺はそつちの趣味はない！ただ、興味があるだけというか、他中から来た転校生はどんな奴なのかなあ〜と気になったというか…そんだけだ！」

必死に否定するところを見る限り、そつちの趣味はないらしい。再び、教室のザワツキが大きくなった。

「そ、そうなんだ。僕の勘違いだね、ごめん」

「別に謝らなくていいって。それより、早く屋上行こうぜ！」
切り替えが早いというかなんというか。

「屋上？昼ごはん食べるのに屋上行くの？」

一応、パンとコーラが入った袋を持つ。前の大地中学校は、嫌でも自分のクラスで、しかも班にして食べなければいけなかった。他の学校もそうかと思っていた。それが、ここは違うらしい。

「雨振らねー限り、屋上で昼飯食うのが当たり前だろ」

「あたりまえ、か」

たしかに、善果にとって珍しくても、ここでは当たり前なのだ。最初が違つと、考えも変わるものだな。

「ま、いいや。屋上で食べるなんて、普通…いや、僕の学校では出来なかつたし」

「よ〜し、それじゃあ屋上にレッツラ・ゴォ〜！」

善果の言葉を最後まで聞かず、静八は右手を突き上げ廊下まで走つていった。そんな静八の後を、ゆっくり歩いて廊下に出た。クラスの中から何人かが善果を見ている。それに気づいた善果は、またか、と口の中で毒づいた。

なんで僕を見るんだ。そんなに僕が珍しいか？そんなに初めて会う相手が気になるのか？

そんなに、大地中学校から来た“泰東善果”が珍しいのか？

差別や軽蔑の目で見られている訳じゃないのに、そんな風に見られている気分させられる。

「…チツ」

誰にも聞こえない小さな舌打ちをして、善果は少し距離の開いた

静八の元へ駆けた。善果が横に来たのを見、静八は二ヒツと笑った。それが気持ち悪くて、気づかれないように少し離れる。

「なんだよ気持ち悪い」

「ん〜、いや、べつつにい」

気持ち悪いと言われても、まったく気にしない静八。二 E を通り過ぎ、角を曲がると目の前に階段が現れた。銀の手摺がついている階段には薄く黒くなっているところが、所々あり、どれ程使われているのかなどが見て取れる。階段の前には、廊下を挟んでトイレがある。“男子便”と、いかにも手書きであろう紙が貼ってあり、意外と中は外からでも分かるくらい広いようだ。そんなことを考えながら階段に足をかける。

「そついやさ、な〜んか善果喋り方おかしくなかったか？」

階段をリズムよく昇りながら静八が言った。

「おかしいって何が？」

善果も昇りながら言う。手に持っている袋が左右に揺れ、中のコ―ラを少し心配したが、袋を揺らさないようにはしなかった。

「なんかさ、クラスの皆がいるときは優しい喋り方なのに、二人になると攻撃的っっーかさ。なんか違うね？」

三という数字から、四に変わった階に見向きもせず、次の階へ進むため階段を昇った。

「僕、喋り方変わってるか？」

そう聞くと、「うんもうバツチリ」と親指を上げ、こつちを見てくる。

「…コレが僕の性格だと思ってて。」

「は？」

意味が分からなくて立ち止まった静八を無視して、善果は進んだ。ちよつと分かり辛かったかな、と思うが、それはすぐに消えた。別に静八に気を使う必要なんてないだろ。五階に着き、目の前のドアノブに手をかけた。

この向こうは屋上だ。どんな屋上なんだろうと興味を持ったまま、

ドアノブを捻った。ドアが少し開いただけで、隙間から風が入り込む。風の抵抗もあり、重いドアを両手で押した。

目にいきなり飛び込んだ太陽に、思わず目を細める。手で太陽の光を遮るように目の上にかざし、屋上の辺りを見回した。使えなくなった机や椅子があり、一面に屋上を囲うように立っている柵。それが目に入り、同時に誰か二人いることに気づいた。

逆光で見にくいだが、その二人もこちらを見ていることは分かった。

第4話「運命の歯車」

「お！雷炎、純！連れてきたぜ！」

逆光と戦いながら二人を見ている善果の後ろから、遅れて上がってきた静八が大きな声を出し、二人に手を振った。真後ろでいきなり、しかも大きな声を出されて思わず肩をすくめる。静八の声に気付いた二人がこちらに歩いてきた。

丁度太陽が雲に隠れ、二人を直視することが出来た。一人は薄茶の髪を肩より少し伸ばし、ニコニコと何が楽しいのか笑ってる。もう一人は見るからに校則違反に引つかかる真っ赤な髪をしていた。学ランのボタンは一つも留めず、中にTシャツを着ており、耳には赤いピアスか何かをつけている。

うわぁ・・・なんか変な奴らに知り合っちゃったなあ…。
そう心で呟いた。

「善果、紹介するぜ。この茶髪は鳥西純。で、こっちが柄井雷炎」
純、と紹介された青年が「よろしくね！」と手を差し出してきた。さつきからずっとニコニコ笑顔だ。初めて静八に会った時の彼の笑顔と同じ。けど、静八の笑顔は何か暑苦しい感じがあり、この純の笑顔は静八のと比べると爽やかだった。差し出している手に自分の手を軽く重ね、弱い力で握った。すると、純も握ってき、おまけにブンブンと振ってきた。

「こ、こっちこそよろしく」

引きつりそうになる顔を何とか笑顔にして言う。数回振った後、純は善果の手を離れた。手が少し痛い。純は笑顔を崩さないまま、隣にいる赤毛、雷炎に肘で突付いた。どうやら挨拶をしろと言いたいらしい。口で伝えればいいものを。だが、雷炎は何も言わなかった。純がもう一度肘で突付くが雷炎は何もしない。それを見ていた静八がちょんちょんと善果の肩を叩いた。

「あいつ、あんなんだけど結構いい奴なんだよ。よろしくやってく

れな」

両手を合わせ、申し訳なさそうな顔で静八が頭を下げた。なぜ彼が頭を下げるのかが分からなかったが、とりあえず「分かった」と答えておく。

「よかつたね〜。お友達が増えたね〜」

「…別に」

純と雷炎の方を向くと、そんな会話をしていた。

「さあて、ご飯食べますか！」

そう言った純の後に続くように、静八が手を上に突き上げ「おお〜！」と声を上げた。

屋上に吹く風は冷たくて気持ちがいいなんて誰が言ったのだろう。けして、気持ちよくなんか無い。冬に吹く風は冷たすぎて身震いし、救いの太陽はたまに顔を出すものの、しょっちゅう雲に飲み込まれ体を温かくしなかった。さらに、強い風が吹くと、軽い砂が舞い上がり、それを屋上まで運んでくる。冬なので、舞い上がる砂はまだ我慢出来るが、これが夏だったら砂は二倍三倍になり我慢できないだろう。夏の太陽が火代わりになり、アスファルトが鉄板、生温い風が熱風…。考えるだけで汗が出そうになるところだが、今はそんな状態ではない。

「寒い」

何回言ったか分からないくらい言っている言葉。無意識に言ってしまうので、抑えられない。

もちろん、聞いているほうは無意識なんて知らず、何回も聞いているわけで

「うるさい」

と、何回もそれに答えた。

「うるさいって・・・君は寒くないの？」

腕を擦りながな善果が言った。摩擦のおかげで、片腕だけが温かくなる。言われた雷炎は、しばらく黙って善果を見ると、ハツと嫌味な顔をして言った。

「テメーと一緒にすんな」

その言葉にムツとした。なんだか腹が立つ奴だ。そんな思いが顔に出てしまったのか、純が顔をしかめて言った。

「眉間に皺がよってるよ」

「え、ウソ」

純がわざと眉間に皺を寄せて、自分の眉間を指差した。善果も釣られて自分の眉間を触るが、皺は寄ってなかった。あたりまえ、力を抜いたら消えてしまうのだから。

「あ、そーいえば善果さ、部活どこ入んだ？」

口の中に物を含んだまま喋るので、少し聞き辛かった。

「部活？」

袋からコーラを取り出し、キャップを捻る。プシュツと大きな音を上げ、炭酸が抜けるのが分かった。

「そうそう。この学校さ、ほとんどの奴らが部活入ってんだよ」

静八は自分の弁当に入っていた鳥の唐揚げを箸で刺して口に入れた。ちゃんと箸で掴んで食べると言いたくなる。

「皆が部活入ってるから、僕も入らなきゃいけないわけじゃないじゃん」

コーラを口に流し込んだ。口の中で炭酸が弾け、それをごくりと飲み込んだ。

「んなこと言わずにさ、部活見てみるって！…あ、なんなら今日の放課後俺が部活案内するぜ！」

「は？いや、だから僕は…」

「照れんなって！」

「照れてねーよ！」

思わず手にしていたコーラを静八に向けて投げつけてしまった。キャップを閉めていたためコーラは漏れなかったが、静八の顔にク

リンヒットしたペットボトルが少し凹んだ。

「…なんか、喋り方とか変わってねーか？」

「だね〜」

善果と静八のやり取りを静かに見ていた二人がポツリと言った。

それを聞いた静八が顔を擦りながら「だろ〜!!」と指を上げる。

「そーなんだよ！善果、最初と全然違うんだよ！」

「もう、うるさいなあ。別にいいだろ、僕の喋り方のことなんか」

「いや、どうでもよくないぞ！」

ため息が出た。けど、どうしてだろうか？会ったばかりなのに、なにか懐かしい気がする。この四人で、こうして食事をし、話をし、つまらないことで怒ったり、笑ったりすることが。ずっと昔も、こうしていた気がする…

その時、僕らはまだ知らなかった。

僕らが出会ったことで、運命の歯車が動き出したことを…

第5話「職員室」

六時間目が終わり、簡単に掃除をした後帰りのホームルーム。前いた大地中学校とまったく同じだった。ホームルームで、この学校には慣れた？と聞かれたので、適当に答えた。

その後、明日の連絡があり、帰りのホームルームは終わった。あつという間の一日だった、と鞆に筆箱や配られたプリントを入れながら思う。教科書とノートは机の中に仕舞ったままだ。

転校初日からの置き勉強はさすがにやめようかと思っただが、教科書とノートを持って帰ったところで一ページも開くことは無いだろうと、結局置き勉強。さらに、今から静八と強請に近い部活動見学に行くのに、持ち歩く荷物をわざわざ重くするなんて体力の無駄使いだ。鞆のチャックを閉め、右肩にかけると、登校した時よりもかなり軽かった。いつもこれで登下校したら、どんなに楽か…。

椅子を机の下に収めて、面倒くさいが善果を職員室で待っていると言っていた静八の所に行こうと足を進めた。静八は自分が入っている部活の顧問に今日は休ませて欲しいと言っている。部活を休んでまで部活案内なんてしてくれなくていいのに……面倒くさい。大体、人の話をどうして最後まで聞かないんだ、強引過ぎる、うざい、声が大きい、うざい、お節介、うざい……心の中で愚痴が零れる。口には出さないが、いつかポロリと言ってしまいそうだが、もし本音を言ってもきくと彼は動じることなく、傷つくことも無く、笑い飛ばすか、拗ねるだろう。

そんなことを考えていると、いつの間にか職員室に着いていた。職員室にくるのは、今日は二度目だ。朝入った時に開いたドアを、同じように開く。とたん、中から暖かい空気が流れてきた。教室や廊下には暖房がないのに、職員室にあることを羨ましく思う。保健室には必要なので分かるのだが、どうしても職員室は納得できない。「失礼します」と誰が聞いているわけでもないのに言い、中に入った。

後ろ手でドアを閉め、少し中に入ってキョロキョロと辺りを見回す。だが、善果の目に映るものは、まだ見たことのない先生や、何人かの生徒で、静八の姿は見当たらなかった。誰かに聞こうかな…と考えると、後ろのドアが開く音がし、振り返った。

「お、見たことねー顔だな」

ぞくり、と一瞬寒気が全身を走った。廊下の寒さではない、なにかが。

「お前、何処のクラスだ？」

職員室に入ってきたのは、白衣を着た男だった。髪は、静八と似た薄茶のような色をしていて、後ろで一つに結んでいる。耳には青いピアスをして、ネクタイは首に掛けているだけ。俳句の下のYシヤツはだらりとしており、見た感じだらしない。寒さはまだ続いているが、それは廊下の空気の寒さだった。さっきの寒さは何だったんだろうか？る疑問を持ちつつ、男の質問に答えた。

「二・Aです」

男は二・Aと聞くと、何かを考えたような顔をして、善果を見た。

「二・Aつーと…ああ、転校生の泰東善果か…？」

「そうですけど…」

「へえ…お前が…」

ジロジロと遠慮無く見てくる男に、イラツとする。やっぱりあんま変わってねーなあ、などと呟いているが、意味が分からなかった。

「あの…なんですか？」

「ん？あー、いや…なんでもねえ。悪いな、ガン見して」

ケラケラと笑って、男は思い出したようにドアを閉めた。寒さが止まった。

「俺は高賀、保険医をしている。まあ、これからいろいろと関わることになるから、よろしくな」

高賀と名乗った男は、善果の頭をポンポンと数回叩き、職員室の奥に行こうとした。ハツとして高賀に声を掛ける。

「あ、静八…鈴木静八がいたら、こっち来るように言ってください」

「ああ。あの猿な」

はいはいと返事をして、高賀は印刷室と書かれた部屋に入っている。善果の場所からは、印刷室の中は見えないは、間違いなく中から静八の声がした。やっぱり声が大いかなと思う。しばらくすると高賀がプリントの束を片手に出てきた。その後ろからひよっこりと顔を出してきたのは、猿と呼ばれていた静八だ。たしかに猿に似ているかもしれないと、一人頷く。

「ワリイ、遅くなった！待っただろ？」

高賀を追い越し、静八が善果の許へとやって来る。静八も片手に何かプリントを持っていたが、高賀とは違うプリントだった。

「別に待ってな…」

待っていないと言おうと思ったが、口をつぐんで言い換えた。

「いこともない」

分かりにくくなってしまったが、待ったと言ったのだ。静八は分かった様に、「あ、そうか？」と笑った。コイツ、分かってなーなと善果は思わず呟く。

「…んで？部活は最初何処に連れてってくれるの？」

肩から少しずり下がった鞆を、肩に掛け直しながら聞いた。

「善果の行きたいところに連れてってやるぜ！ほら、この紙に全部活の名前と練習場所が書いてっから」

ほら、と言って渡されたのは、静八が持っていたプリント。受け取ると、確かにその紙には部活の名前と練習場所が書かれていた。しかも、丁寧に学校の見取り図付きだ。行きたいところに連れてってやる、と言われても、元々部活なんて興味が無いのだが…適当に部活を選んで早く帰ろうと部活を選んでいると、静八が何かに気が付いたように言ってきた。

「迷うくらい行きたい所があんだな。だったら、全部の部活回ろうぜ！」

ゲッ！と顔を引き攣られそうになる。全部活を回るなんてとんでもない。それはちょっと…と善果が口に出そうとした。

「なら、春山の所にも行かないとなあ」

存在を忘れていた高賀が嫌な笑みを浮かべて言い、善果の言おうとしたことは遮られてしまった。

「分かってるよ」

ブーと口を尖らせて、静八が高賀に言った。春山、と聞いて頭を捻る。誰だ？と。きっとこの学校の生徒か先生なのだろうが、今日転校してきた善果が知るはずが無い。

「ほんじゃ、善果！行こーぜ！」

腕を掴まれ、引つ張られるまま職員室を出る。高賀も一緒に出てきて、ドアを閉めた。

「じゃ、俺は保健室に戻っからな」

そう言っつて、職員室の隣にある階段を下りていった。その時、偶々目に入った高賀の足元を見て、思わずため息が出た。ただでさえだらしない格好をしているのに、トイレで履くようなスリッパを履いている。しかも、可愛いピンクの花柄付きだ。

「俺達も行きますか！」

ため息をついて、気が抜けたところをいきなり引つ張られ、転びそうになるのを何とか堪えて観念したように善果も歩き出した。いたい何処に連れて行ってくれるのやら…。

第6話「静八の部活案内1」

この学校の部活は変わったものが多いな。

そう思ったのは、静八から受け取ったプリントを見てからだ。弓道部、少林寺部、柔道部、応援部など、中学校では珍しい部活が多く、バトン部、バトミントン部、バレーボール部、卓球部など、ありきたりな部活が無い。静八いわく、この学校の校長は“ありきたり”というものが嫌いらしく、建立当時からなかったとか。

その代わりのように、見たことも聞いたことも無い部活が目に入った。

実験部、眼鏡部、ロボット部、飼育部、妄想部……。

「妄想部って何？」

思わず聞いてしまった。実験部やロボット部などは大体想像がつくのだが、妄想部なんてまったく分からない。…眼鏡部もあまり想像できないが。

「あー、えーっと…まあ、そのまんま？」

疑問を疑問で返されても困る。

「いや、僕が聞いているんだけど」

そう言うと、静八があからさまに嫌な顔をした。こう、スライムをブニユツとつぶしたような顔。

「な…なんだよその顔。部活案内してくれるって言ったのお前だろ？」

「そーだけだよ…じゃ、じゃあ最後に案内すつから、それまで我慢してくれ！頼む！！」

頼むほどのことなのか？と思う。別に、ただどんな部活か聞いただけなのに、頭までさげられてしまうとは。それに、案内をしてもらうことになってしまった。

これは、自分の言い方が不味かったなど、善果は頭に入れた。

「それじゃ、最後に教えてね」

「了解しました、隊長！」
ふざけ交じりで言った静八の元気な答え方に、何故か善果は聞きなれたような、懐かしさを感じた。

静八が最初に連れてってくれた場所は運動場だった。
広すぎも狭すぎもしない運動場では、三つの部活が練習をしている。

「目の前でひたすら走ってるのが陸上部、その少し右奥でボール蹴ってんのがサッカー部」

説明されなくても、見ただけで分かる部活だ。

ひたすら走っているというより、腿上げをしながら走っている陸上部と、ボールを蹴っているのではなく、どう見てもリフティングをしているサッカー部。ホントに案内する気あるのかなと思ってしまうが、善果自身は案内なんてどうでも良いのであえて言わなかった。

それから、左奥の方で声を出しながら走っている…

「あれが野球部だ。去年は県大会まで行ったんだけど、今年は市内大会で惜しくも四位。けど、来年は全国目指してんだぜ！部員は二年が十五人、一年が二十人。善果も今なら頑張ればレギュラー取れるぜ！」

親指を立てて、こっちを向いている静八の顔を見てあきれろ。野球部だけやけに説明が多いな。野球部入る気無いから、と呟くと、静八の親指は元気なく伏せられた。

「そんなスツパリ言わなくても…」

「野球とかサッカーとかは見る方専門だからって言えばよかった？
そう言つと、すぐに元気を取り戻し、そっか！と手を合わせた。

「なら、今度試合ある時チケット渡すな！」

「え、いや、それは」

「大丈夫だ！絶対全試合勝つからよ！」

察しろよ！と怒りたくなつたが、怒る前に静八はさっさと運動場から出て行くこうとしていた。早く部活案内を終わらせて欲しい善果としては、すぐに行動することは嬉しいのだが、まあなんというか……。

少し複雑な顔をしたのに気付いたのか、静八が苦笑した。

「悪い。部活に三年の先輩が来ててさ。見られたら何か言われそうだから、次に早く行くこうぜ」

そういうことか、と頷く。見つかつて、善果も何か言われたらこれこそ時間がもつたいない。

善果も運動場から出ると、静八が足を地面にとんとんと数回踏みつけていた。アスファルトの地面の上に靴の裏の間から出てきた砂が落ちた。

「善果もした方がいいぞ。ほつたらかしくと、下駄箱の中がいつの間にか砂だらけになっからよ」

言われなくてもやるつもりだった。つま先を軽く地面に数回つける。そこまで運動場を歩いていないので、静八と同じくらい数量の砂が落ちた。

「次は体育館行こーぜ！」

「あー、はいはい」

体育館は運動場から校舎を挟んだところにあつた。二階建てでかなり大きいのは、体育館と武道場が一緒になっているからだ。二階には、弓道場と剣道場もある。校舎と離れているため、雨が降つたら移動は大変そうだが。

「体育館はこつちの扉から入んだ。左のは武道場だから」

これも説明されなくても分かった。左右の扉は両方開いており、中が丸見えだからだ。というか、プリントにちゃんと書いてあるか

らというのもある。

武道場からは柔道部の掛け声がし、体育館からはバスケット部のボールの音がした。

ちらりと柔道部を見るが、一人も知り合いはいなかった。

転校してきたばかりで当たり前といえるが。同じようにちらりとバスケット部を見た。どうせ誰も知らないだろうと思っていたのだが、一人だけ、いた。

「あ」

純だった。一年生と思われる男子にショットのコツを教えているのか、身振り手振りをして何かを言っている。会話の内容は聞こえなかったが、バックボードを指差しているので、きと小さい枠を狙うように投げれば入るよとか何とか言っているんだらうと勝手に考えた。

「なーんだ、今日はまだ試合してなーんだ」

つまらなさそうに言いながら、静八は体育館に入っていこうとした。というか、お前は外靴で体育館入ろうとするなよ。

「あ、ちょ、中入んの？」

「え？入らねーの？」

逆に聞き返されてしまった。たしかに部活案内をしているわけなのだから、体育館入って、バスケット部をまじまじと見るのがいいのかもしれない。だが、善果は案内なんてしてもらわなくていいのだ。

「ぼ…僕、この後用事があるから、早めに他の部活案内して欲しいな…なんて…」

でっち上げの嘘をポロリと言うと、静八は体体育館に突っ込んでいた片足をすぐに外に出した。

「それならそうと先に言えよ」。なら、早く他の所行こうぜ！」

ああ、なんか言葉を一切疑わない単純な奴でよかった…。

第7話「静八の部活案内2」

「チエ、剣道部今日やってねーのかよ…」

体育館の真上にあたるここは、弓道場。隣の剣道場では運悪く（善果としては運良く）部活が休みなようで物音ひとつしない。

だが、そのおかげで弓道場からの微かな音が聞こえた。

何かを弾く音と刺さる音。話し声は全くしない。

「…えらく静かなんだね、弓道部って」

扉が片方だけ開いていたので、そこから中を覗き込む。弓を持って構えているのが三人いた。その後ろで何人かが立っている。

瞬間、弓から矢が放たれ、目で追うより速く斜め下に刺さった。さっきの音はコレだったのかと呟くと、突然肩を突付かれ振り返った。

「善果、珍しいもんが見れるぞ。よく見とけ」

そう言って静八が指差した方を見ると、さっき善果が見ていた矢を放った部員がいた。なにが珍しいんだろうと少し興味を持った目で見てみると、矢を放った部員は静かな足取りで後ろへ下がっている。

あれ？と思っているとすぐに違う部員が弓と矢を持って前に出てきた。中を覗いた時には気付かなかった部員。白と黒の胴着に何故かしつくりきている赤い髪。耳につけている赤も良い色をだしている。

「あいつ、弓道部だったんだ…」

意外だな、と付け加えると、後ろで静八が小さく笑いながら皆もそう思ってるんだぜ、と呟いた。

そんな意外な部員、雷炎を善果はガン見した。二本持っていたうち一本の矢を床に置き、もう一本を弓につけ構えた。他の部員は雷炎が弓を構えたのに気付くと、皆雷炎を見ている。

ゆっくりと弦を引き、数十メートル離れた的をじっと見ると、彼

はそこから目を逸らすことなく弦を離した。トス…といい音が鳴り、矢は的に、しかも真ん中に刺さった。

…なんだろう？と思わず善果は首を傾げた。雷炎が矢を放った姿を見るのは、今日が始めてなのに、なぜか見たことがある気がする。今日、初めて弓道というものを見たのに、初めて彼が弓を引く姿を見たのに、善果は初めて見たものを初めて見たとは思えなかった。

「…か、善果！」

後ろから静八に呼ばれハツとすると、雷炎は後ろに下がっており、違う部員が弓を引いていた。

「どうしたんだよ、ボーっとして…」

「…僕がボーっとしてた？」

「ああ。なんか雷炎見たとたんボーっとか口あけて間抜けな顔して目半開きで…」

してないよ！と鋭くツツコミを入れると、善果は弓道場から目を離し、勝手に階段を降りようとした。考えたところで何も出てこないだろう。もしかしたら夢で見たとかもあるし、などと自分に言い聞かせた。

「ほら、速く案内してよ。時間が来ちゃうだろ」

そう言っただけで階段を降りると、「そっか、なら急ぐぞ！」と後ろから静八が追ってきた。

テニスに柔道、少林寺に吹奏楽、音楽パソコン放送部とある程度簡単に回ると、本当にめんどくさくなってきて、最後に一つだけ見ることにした。もちろんそれは最初から気になっていた妄想部。

「妄想部ってどこでやってんの？」

現在校舎二階職員室前。放送部は職員室の中にある放送室で活動しているので戻ってきたのだ。最初に案内しろよな…と言いたかったが、まあいいだろう。言ったところでもどうにもならないのだから。

今から行く妄想部について静八に聞いてみると、彼は「あゝ」とか「うゝん」とか曖昧過ぎる答えしかしないので、答えやすい事を聞いてみた。これでトイレなんて答えたら殴ってやるうか…
「美術室」

「は？なんで美術室？絵でも書いてんの？」

「えゝつて、あゝ…いだ！」

自分より少し高い頭を殴ってやった。

美術室の扉は閉まっていた。しかも、珍しく扉は中が見えないように黒い。ガラスをマーカーで黒く塗りつぶしたような感じだ。

「通称、禁断の扉…」

「は？」

「この扉、そう言われてんだよ。とにかく俺は外で待ってるから行って来てくれ」

「なんだよそれ。案内は？」

ムツとした顔で静八を見ると、何気に冷や汗をかいている。そんなに妄想部ってやばいのかな？と思いつつも扉に手を掛けた。

「お前も入れよ」

「ゲ！やだつて！扉開けんの待て！俺があっち行ってから…」

聞く耳も持たないまま、善果は扉をガラリと開けた。ギヤーと煩く叫んでいる静八の腕を無理矢理掴んでズカズカと中に入る。美術室には珍しく綺麗な机と椅子、それから妄想部の部員と思わしき女子四人が目に入った。

「…なんだ、男子がいないだけで普通じゃん。何怖がつてんの？」

「い、今なら来てない！速く！善果速く帰ろっぜ！な？用事があるんだろ？な？」

速く速くと言われると、逆に遅くしたくなる。

「もうちょと待てよ。あ、その女子、何してるの？」

作り笑顔で机で何かを書いている部員らしき女子の方に近づいた。女子は四人いて、その内三人がどうやら絵を描いているらしい。もう一人はカメラをいじっている。

「あれ？初めて見る顔だね。名前は？」

絵を描いていた一人が手を止め、善果に尋ねてきた。善果は笑顔を崩さないまま答えた。

「僕、転校してきた泰東善果。よろし…く…」

言いながら自分の顔が引きつっていくのが分かった。

「な、何描いてるの…？」

女子部員の手元の紙を見て、動揺している善果に気付いた静八が、隙を突いて腕を振り払った。そのまま美術室を出て行くのに、善果は気付かない。絵を凝視している。

「あれ、泰東君…だっけ？何描いてるのって、知っててここに来たんじゃないの？」

「いやー、あの…」

「一般的にBLとか801とか言うんだけどね。知ってるでしょ？」
サラリと言われた単語にますます顔が引きつっているのは無意識だ。BL？801？何ソレ、おいしいの？とボケるべきなのか！？
なんてくだらないことしか考えられない頭がやっこのことで思い浮かんだのは…

「腐女子？」

「そうとも呼ばれてるなーうちら」

「なんだ、善果君知ってるんやん」

選ぶ言葉を間違えたようだ。女子部員四人はキヤーキヤーなぜか話が盛り上がり、善果は静かに足を一步引いた。これは、逃げた方がいい。

そう思い、このままダッシュをかけようとした時、不意に後ろから温かいものに包まれた。抱きしめられているのだ。しかも、顔は見えないが首辺りにある袖は、男子の制服のソレ。

善果は自分でも分かるくらい毛が逆立った気がした。

「やっべえ、コイツ超可愛いんだけど！俺が食べていーと？」

声を聞いて更に毛が逆立った。男子の制服といい、この低い声といい、コイツはまさしく男だ。

「男お！！っ、離せよ！！！」

「うわっ暴れんなって！ちょっと食べるだけだっつて！」

「わああ！！僕も男です！！！」

男に抱きしめられている。そう分かり、善果は手足をバタつかせた。だが、男の腕は緩むどころかビクともしない。本格的にヤバイ

…！

「カメラ準備OKだお！」

「カメラ！？」

「そっか、じゃ、いただきー」

「ちよお！やめっ…！」

この時、善果の転校初日は最悪な日となった。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1846e/>

僕らの非日常

2008年11月7日07時08分発行